

# 名詞から分量詞への文法化の程度を測る

福田 薫

## 1. はじめに

現代英語には表面上 N1 of N2 という形式の多様な表現がある。(1)のように、N1 が容器、グループの集合、材料、一定の分量や形状を表すときには、N1 や N2 の解釈に違いが見られる。

- (1) a. a cup of the coffee, those bottles of the wine  
 b. a cup of coffee, a bottle of wine

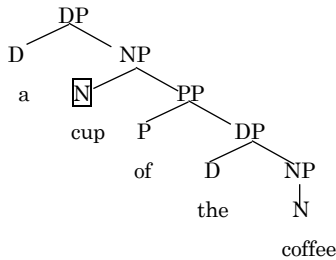
たとえば、(1a)の N1 は「N2 の一部を入れた容器」と解釈され、N1 と N2 は全体・部分の関係にある。これに対し、(1b)の N1 は「容器」読みの他に、単に N2 の分量を規定する解釈も可能である。前者は部分構造(partitive construction)、後者は疑似部分構造(pseudo-partitive construction)と呼ばれる。

本研究では、まず、現代英語には両構造が併存するが、いくつかの統語的ふるまいの違いによって区別可能であることを示す。次に、部分構造から疑似部分構造への文法化の過程が、現代英語では共時的変動として存在する、すなわち、N1 of N2 という表現が疑似部分構造として解釈される割合が、N1 ごとに異なることを示す。ここでは、調査項目として動物の群を表す語を選定し、現代英語のコーパスを調査、分析した結果を提示する。終わりに、文法化の程度差につながる要因について若干の検討を行う。

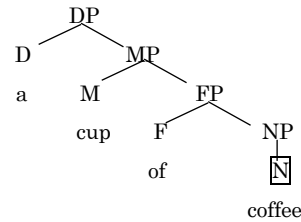
## 2. 部分構造と疑似部分構造

先行研究において、部分構造との対比を通して、疑似部分構造における N1 と N2 の統語的、意味的な特性が議論されてきた。ここでは、Stickney(2009)に従って、(2a, b)に示される構造を仮定する。

### (2) a. partitive construction



### b. pseudo-partitive construction



(Stickney 2009: 47)

Stickney(2009)は、疑似部分構造(2b)が機能範疇 M と F を含むと分析する。(2b)の cup は名詞本来の語彙的内容が薄れ、後続する N2 の分量を表す分量詞 M(Measure)へと機能が変化している。また、of も前置詞とはちがって、特定のタイプの名詞だけを取る機能語(Functional)である。Stickney(2009)は、このような構造を仮定することにより、(3)をはじめとして両構造の違いの多くが説明できると主張している。

### (3) 部分構造と疑似部分構造の特性の比較

	部分構造	疑似部分構造
主要部	N1 (PP 補部をとる)	N2
DP の数	2つの DP	1つの DP
N1 先行要素	語彙的名詞 冠詞, 数詞, 形容詞などの限定修飾表現	(機能範疇) 分量詞 φ または不定冠詞のみ
of	前置詞 (DP 補部をとる)	機能語 (NP をとる)
N2	DP (定の名詞)	NP (不定の物質または複数形名詞)

## 3. 疑似部分構造への文法化と共時的変動の検証

疑似部分構造は部分構造から文法化の過程を経て発達したと考えられる。文法化とは通時的には言語表現の自律性の低減としてとらえうる (Lehman 1989) が、低減現象は項目ごとの個体差を伴うので、共時的に見るなら、文法化の進展は言語内の変動として観察されるだろう。この仮説を検証するために、調査項目として動物の群を表す 5 語(herd, flock, school, pride, swarm)を選定し、COCA コーパスを調査して得られた用例(合計 3,77 件)に対し、 $\chi^2$  乗等質性検定およびホルムの方法による多重比較を行った。

はじめに、「N1 が本来系以外の群タイプを表す N2 と共起する割合が多いほど、N1 の文法化が進んでいる」という作業仮説を立てて、N1 と共起する N2 を意味タイプごとに分類し、非本来系の N2 と共起する割合を比較した<sup>1</sup>。次に、「N2 が主要部であると解釈できる用例の割合が多いほど、N1 の文法化が進んでいる」という

作業仮説の下で、N2 を主要部と解釈できる用例の頻度を集計し<sup>2</sup>、その割合を比較した。

表 1 N1 と共起する N2 の意味タイプ別頻度

N1	非本来系				小計	合計
	本来系	人間	他動物	無生物		
herd	1,033	100	51	18	169	1,202
flock	923	182	58	28	268	1,191
swarm	296	259	95	170	524	820
pride	55	2	1	1	4	59
school	466	11	11	3	25	491
合計	2,781	554	216	220	990	3,771

$\chi^2$  乗等質性検定 ( $\chi^2=825.55$ , 自由度 4,  $p<0.0001$ )

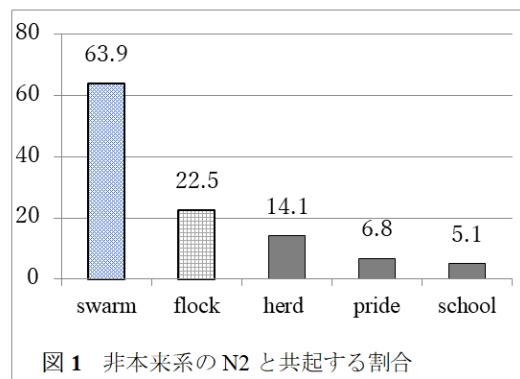


図 1 非本来系の N2 と共起する割合

表 2 主要部と解釈できる用例の頻度

N1	N1	2 通り	N2	合計
herd	520	504	182	1,206
flock	335	581	273	1,190
swarm	170	420	233	823
school	114	269	108	491
pride	9	43	8	60
合計	1,147	1,820	804	3,771

$\chi^2$  乗等質性検定 ( $\chi^2=171.43$ , 自由度=8,  $p<0.0001$ )

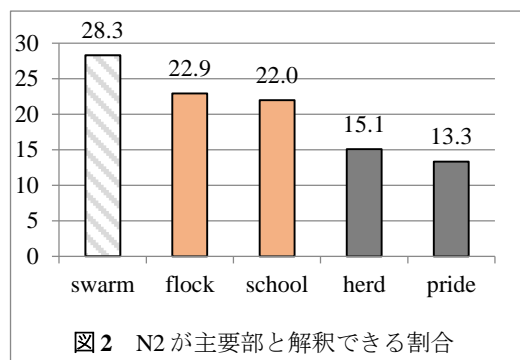


図 2 N2 が主要部と解釈できる割合

表 1 と表 2 に対して  $\chi^2$  乗等質性検定を行った結果、いずれも有意であった。そこで、多重比較を行ったところ、3 段階の有意差が認められ、調査項目を(4)のようなグループに分類できる。

(4) a. 非本来系の N2 タイプと共起する割合: { swarm } > { flock } > { herd, pride, school }

b. N2 主要部と解釈できる割合: { swarm } > { flock, school, } > { herd, pride }

#### 4. まとめ

動物の群を表す 5 語をコーパス調査し、得られた用例を項目ごとに頻度集計し、統計解析を行って、疑似部分構造化の進展度を比較した。その結果、調査項目の間にほぼ同様の程度差を検出できた。これは、文法化の進展度の反映が共時的な変動として確かに存在することを示している。ただし、観察される差は、調査項目の使用頻度 (Bybee 2003)、量化に適した表出力を有する複数形の頻度 (Brems 2004)、あるいは意味的磨滅への抵抗となる個別的な情報量の豊かさなどの要因と直接に関連していない。ただし、swarm が他の項目よりも強い「否定的プロソディー」を有することが、共起語の拡張に有利に作用する (Brems 2003) のかもしれない。文法化につながりうる要因を解明するために、今後さらに多くの事例の詳細な検討が待たれる。

#### 参考文献

- Brems, L. (2003) "Measure noun constructions: An instance of semantically-driven grammaticalization," *International Journal of Corpus Linguistics* 8, 283-312.
- Brems, L. (2004) "Measure noun constructions: Degrees of delexicalization and grammaticalization," in Aijmer, K. and B. Altenberg(eds.) *Advances in Corpus Linguistics: Papers from the 23rd International Conference on English Language Research on Computerized Corpus(ICAME 23)*, 249-265, Rodopi.
- Bybee, J. (2003) "Mechanism of change in grammaticization: The role of frequency," in Joseph, B. D. and R. D. Janda(eds.) *The Handbook of Historical Linguistics*, 602-623, Malden, MA: Blackwell Publishing.
- Lehman, C. (1989) "Grammaticalization: Synchronic variation and diachronic change," *Lingua e Stile* 20, 303-318.
- Stickney, H. (2009) *The Emergence of DP in the Partitive Structure*, Ph. doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

<sup>1</sup> 集計の際に、cars, helicopters, drones, missiles など、動力をもつと解釈できる N2 は「他動物」に分類した。

<sup>2</sup> 当該の構造において N1 や N2 に先行して限定する要素、述部動詞と N1 あるいは N2 との間の数の一致の有無などを (疑似) 部分構造と判断する基準として用いた。